

学校名：横浜国立大学教育人間科学部附属特別支援学校

氏名：福田 千登勢

1. 今回の研修における目的やねらい

- (1) タンザニアでの海外研修を通して、見る、体験する、感じることで感性を磨き、教師としての資質を高める
- (2) タンザニアという国から日本とは異なる文化を知ることで世界の文化の多様性を理解し、広い視野を持って教育活動に携えるようにする
- (3) 開発途上国での問題について考えることで、自分にできることを探し、教師海外研修後、「国際理解教育（開発教育）」に取り組んでいく

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

- (1) については、「百聞は一見に如かず」といわれているように、タンザニアに行き、実際に、見る、体験する、感じることができた。タンザニアを知ることで、日本の「～するのが当たり前」「～があるのが当たり前」という考え方が変わった。生徒に対しても、今まで以上に柔軟に対応して、個々の成長に努めていきたい。
- (2) については、タンザニアの中等学校との交流、村人にインタビューするという機会だけでなく、現地で活躍されている JICA の方のお話を聞いて、タンザニアのいろいろな面を知ることができた。今後、タンザニアでの研修を活かし授業をするにあたり、生徒達にはタンザニアを自分の近くに感じるきっかけを与え、一人だけではなく共に支え合って協力して生きていることを伝えたい。そのために、タンザニアでの生活（衣・食・住）、文化、学校での様子を写真などを使って伝え、できるだけ生徒自身が自分でやってみる体験を取り入れて授業を展開したいと考える。最終的には、生徒達達のこれからの生きていく力になればよいと考えている。
- (3) については、タンザニアにおける国際協力の現場を実際に体感することを通じて途上国の現状や日本との関係について考え、その経験を教育現場の多くの場面で広げていきたいと考えている。

3. タンザニアから学んだこと

タンザニアを知ることで、日本のよいところ、恵まれた環境に気づいた。また、タンザニアの人々と触れ合う中で、日本人が忘れかけている 2 つのことを気づいた。1 つ目は、お互いに相手を認めて共存していこうという意識である。タンザニアでは、朝、コーランが聞こえる。イスラム教 40%、キリスト教 40% という宗教が共存して生活をしている。学校でも、宗教の違う生徒達が、共存して、生活している。お互いに相手を認めて、支え合って生きる姿勢は、個の意識が強くなっている日本で忘れかけているものではないかと感じた。2 つ目は、直接会って会話をする大切さである。日本では、携帯電話、メールなどで直接会わずにコミュニケーションをする機会が増えている。また、ゲーム機器の普及から、余暇の時間を一人でゲームをする子どもたちが多い。タンザニアでは、言葉は通じなくてもタンザニアの人々は、私の目をみて、話しかけてくれた。「あなたを認めます」と言ってくれているようで、安心できた。日本は、相手の目をみて話して、感じる心と心の触れ合いが必要ではないかと感じた。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

この研修で得たものを生徒、同僚の先生、家族、知人等、それぞれの立場にあった内容を多くの人々に伝えたい。同僚の先生には、タンザニアの教育現場から感じたことを伝えて、開発途上国の教育の現状を知ってほしい。家族や知人には、タンザニアの生活を伝え、開発途上国の現状を知ってほしい。生

徒には、授業を通してタンザニアの文化や生活を伝え、身近な国に感じてほしい。

そのためには、今後、膨大な情報量を頭の中で整理して、自分自身の言葉で発信する必要があると考えている。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

最初は、聞いたことが理解できなかつたり、疑問が残つたりすることがあった。しかし、研修を続けて多くの人との出会い、話を伺っていく中で、点と点が線となって結びつき、知識として吸収される瞬間を実感することができた。その瞬間が嬉しかった。

また、研修メンバーが、役割分担をして自分の仕事を理解し、役割を果たしていくことでチームとして団結していった。お互いのよさを認め合いながら、協力できたからこそ、実りある研修になったと思う。

6. 海外研修での役割（日直や各担当）を振り返っての感想・提案など

私は、キパランガンダ中等学校との交流係を担当した。隊員の方とメールで何度かやりとりをして、研修メンバーと相談しながら、交流プログラムを作成していった。前日は、電話で最終確認を行った。電話でも確認ができたが、最終の打ち合わせは、電話では聞きとりにくい部分もあるので、可能なら直接会って打ち合わせができるとよいと思う。（もう一方の中等学校の交流は隊員の方と直接打ち合わせができたので）

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

研修中、情報を共有できるふりかえりの場を毎日もてたことで、頭の中が整理された。ファシリテーターの小野さんのアドバイスや助言もとても参考になった。疑問を解決したり、課題を持って、次の日につなげることができた。

タンザニアから日本に帰国する時に「もっとタンザニアにいたい！」と心から思った。それは、田中さん、宮本さんをはじめとする JICA の方々、ファシリテーターの小野さん、テレビ神奈川の神谷さん、足立さんをはじめとする現地の JICA の方々、同行していただいたフィリップさんやサラさん、現地での青年海外協力隊の方々・・・多くの皆さんの支えがあつてからこそ、充実した研修になったからだと思う。また、10 日間を共にした研修メンバーにも恵まれ、この研修に参加し、多くの経験ができたことに感謝したい。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

- ・タンザニアという国を知ることは、客観的に日本を知ることにつながると思う。10 日間という限られた期間で、多くのことを吸収するために、事前にタンザニアについて、調べて、疑問をもっていくと、さらに実りある研修になると思う。
- ・集団行動なので、周りを考えて、時間を守ることに気をつけた。
- ・研修中は、朝から夜まで活動するので、事前から土台となる体調を整えて、参加することが大切だと思う。研修中は、体調が思わしくない時は、早く休養をとって、治すように心がけることも大切だと感じた。
- ・食事は、野菜や果物を食べる機会が少なかった。感染症の危険性がある生野菜やカットフルーツは、食べられなかった。ビタミン不足になりがちなので、できるだけバランスのよい食事を心がけ、ビタミン剤なども持っていくとよいと思う。
- ・あいさつは、多くの場面で必要なので、スワヒリ語で簡単な挨拶ができればよいと思う。中等学校では、英語も学習していたので、英語でも会話ができるとコミュニケーションの場が広がると思う。

9. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
8月11日(日) -12日(月)	日本からタンザニアまでの 移動中および現地到着	タンザニアで一番大きな町ダルエスサラームは、高い建物があったり、街並みが整備されていて発展していて私が思っていたアフリカのイメージでとは異なった。車が多く、日本の中古車多いのにも驚いた。ホテルに向かう途中、交通ルールを守らない（お互いゆずりあわない）で、危ない場面が幾度かあり、日本は交通ルールを守って安心できる環境であると感じた。トレイの上にペットボトルのミネラルウォーターを数本置き、頭の上に載せて、道を歩く姿、靴が無造作に道に並べられ販売しているなど日本ではみられない光景で、見るもの全てが新鮮だった。
8月12日(月)	JICA タンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	大西所長から、タンザニアでの JICA の取り組みについて話を伺った。タンザニアでの電化率は 15%だということを知り、東京のような高層の建物が立ち並ぶダルエスサラームの町をみた限りでは、考えられないことだったので、町の格差が大きいのではないかと感じた。デシバルさんから健康管理、阿部さんから安全対策についても話を伺った。健康面、安全面に気をつけることが、この研修を充実させる土台になることを実感した。
8月12日(月)	本日の振り返り	ダルエスサラームの町をみて、気づいたこと、おもしろいと思ったことを話しあった。ゴミが山積みになっていたこと、電気が通っていたこと、日本の車が多く走っていたこと、車が停車していると歩いて窓越しに物を売りにきたことなどの意見がでた。
8月13日(火)	JICA タンザニア事務所 研修ブリーフィング	ガバナンスセクター木全次長の研修を受け、日本でお会いしたムホンデさん、ブライアンさんの仕事であるファシリテーターの役割が、少しずつわかってきた。O&ODプロジェクト（地方自治強化のための参加型計画策定とコミュニティ開発強化プロジェクト）を進めるにあたり、群のファシリテーターは、県と村とをつなぐ大切な役割をしていることを理解した。
8月13日(火)	モロゴロへ移動	ダルエスサラームからモロゴロまで、4時間という長時間の移動となった。ダルエスサラームから離れていくと、村のような集落がいくつもあり、道路沿いにお店をだしていた。オレンジなどの果物やトマトなどの野菜を売っていたが、購入している人の姿はみられなかった。購入者は誰なのか？買い物をする時間帯があるのか？疑問を感じた。広場で、サッカーをしている子ども達の姿をみることができた。集

		落のトイレにも立ち寄った。自分でバケツから水を汲み、流すことを初めて体験して驚いた。
8月13日(火)	本日の振り返り	JICA タンザニア事務所での研修、ダルエスサラームからモロゴロへ移動で気づいた点・疑問点などを話し合った。O&OD プロジェクトは10年という長いスパンで行う。村人は、納得して行っているのか、村人にとって本当に必要なプロジェクトなのか、成功した事例を明日以降のMaseyu村の視察、村人にインタビューや交流を通して疑問を解決していきたい。
8月14日(水)	Maseyu村 Mazizi地区 Maseyu村 Mjini地区 サイト視察	O&ODプロジェクトでできた幼稚園、建設中の保健所を視察した。幼稚園は、小学校と同じ敷地内にあり、4人で半年ほどかけて建設したそうだ。小学校、建設中の幼稚園ともに、赤いレンガの色が印象的だった。小学生が、タンザニアの国歌を歌ってくれた。村で、レンガを作っているレンガ銀行を視察した。4、5人が、セメントを型に入れ、型から出して固める流れ作業を行っていた。レンガは、それぞれの家庭でも、ノルマがあり、建物の建設に使われているそうだ。村人が、携帯電話で話している姿をみて、水や電気の普及より携帯が必要なのか、疑問をもった。村の女性は、カンガを着ている人が多かった。カンガを衣服として着用の仕方でも様々で、カンガをベビーキャリアとして使用している女性もいて様々なカンガの使い方を知った。女性組織「アマニ」は、カンガ・ひえ・せっけんの販売をして活動していた。
8月14日(水)	専門家との懇談会	柿崎専門家と食事をしながら懇談会を行った。今回のO&ODプロジェクトは、フェイス1、フェイス2があり、フェイス1の人材を育てる取り組みは、ほぼ完成しているそうだ。長いスパンで考えるO&ODプロジェクトは、先がみえなく、途中で方向性が変わることはないのか疑問をもった。
8月14日(水)	本日の振り返り	トマト4個で500シリング(25円)、キャベツ1個2000シリング(100円)で野菜を売って生活するのは、たいしたお金にならないことがわかった。携帯電話は、10年ほど前から普及し、5年くらいで持参者が増えたことがわかった。電話やメールを使用し、携帯料金は13000シリング(1カ月)と聞いた。道路沿いに、「Vodacom」という携帯会社を何度もみたので、需要があるからこそ携帯会社も多いことがわかった。
8月15日(木)	Maseyu村 Mjini地区 関係者インタビュー	日本の紹介を写真を使って紙芝居風に行い、村人は、戦後からの日本の急成長に興味をもったようだった。メモをとって、真剣に聞いてくれた村人もいた。3つのグループに分かれて、村人6名に私たち教員(3

		名) が、インタビューを行った。「今、必要なものは何か」と一人ひとりに質問をしたところ、2名が教育が必要だという答えに驚いた。もっと勉強したいという意欲が伝わった。また、お金が必要だといった主婦は、子どもの教育費がほしいといていた。O&OD プロジェクトで人々が話し合うことが教育の場になると考えている人もいて、O&ODプロジェクトが、村の人々が団結するきっかけを作ったことがわかった。
8月15日(木)	小学校視察、村人との交流	小学校と幼稚園の視察を行った。幼稚園の建物はなく、まだ建設中であった。机・椅子がなく、石の上に座って授業を行い、雨の日は授業ができないので、登校する子どもは、少ない現状を幼稚園の先生から聞いた。日本の教育のあって当たり前だと思っていた整った環境に感謝の気持ちをもった。村人との交流は、ソーラン節、相撲、空手、皿回し、大縄跳び、パラシュート(バルーン)などを行った。村の女性のダンスの披露もあり、有意義な交流となった。
8月15日(木)	市内視察(モロゴロ)	教科書とカンガの購入、スーパーマーケット・市場の視察を行った。市場では、日本での収穫できるトマト・ナス・ピーマン・オクラなどが並んでいた。どの野菜も山型のように積んで盛られていて日本では、みられない風景だった。道路の道沿いで売っている野菜も山形に盛られていた。
8月15日(木)	隊員との懇談会	赤堀隊員と食事をしながら次の日のムグラシ中等学校での交流の打ち合わせと親睦を深めた。赤堀隊員は、バイタリティーにあふれていて、交流の内容・日程について細かい打ち合わせができてよかった。
8月15日(木)	本日の振り返り	3つのグループに分かれて、村人との交流を行った報告をした。村で作っている農作物は、自分たちが食べる目的が主である。畑で、働いている姿をほとんどみなかったので、不思議に感じていたが、大量生産して売る目的でないことを知り納得ができた。農作物を売るシステムを整えば、村の人々の生活が豊かになるのではないかと感じた。昼食時、村人におにぎりとおみそ汁を食べてもらった。のりをはがして食べようとする人、箸をストローのように使おうとした人など食文化の違いがわかった。
8月16日(金)	ムグラシ中等学校 赤堀隊員	生徒達の前で、自己紹介を行った。私は、片言のスワヒリ語だったが、一生懸命聞こうとしてくれる姿が嬉しかった。交流授業では、日本の紹介・かぶと作り・習字・アンケートを行った。日本のアニメでは、キティちゃんを知っている生徒がいた。かぶと作りは、個々の生徒に折り方を教えて全員完成した。

		生徒の嬉しそうな姿をみることができた。写真を撮ってほしいという生徒が多く、撮影した自分の顔を見て満足しているようだった。「僕は、あなたが質問をしてくれたら、答えます」という生徒が話しかけてくれた。しかし、聞きたいことが、英語で伝えることができず悔しい気持ちになった。校庭での交流では、学校から持っていったパラシュート（バルーン）を生徒たちと行うことができた。「モジャ、ムビリ、タトゥ」のかけ声で、バルーンの中に空気を入れて周りを閉じるとドームのようになり、生徒達が、楽しんでいる姿がみられた。
8月16日(金)	ミクミ国立公園通過 モロゴロへ移動	ミクミ国立公園を通過途中、もしかしたら・・・動物は見られないかもと諦めかけた時に、道路にサルを見つけた時は、嬉しかった。その後、インパラ、キリン、ゾウ、シマウマをみることができ感激した。野生の動物は、木や草の色に混ざって、見逃してしまいそうな時もあった。キリンは、黄色ではなく、クリーム色に近かったので、草木の景色に同化していた。大きなバオバブの木を見ることができた。
8月16日(金)	本日の振り返り	ムグラシ中等学校での交流では、3つのグループに分かれて活動はできなかったが、団長を中心に臨機応変に対応して、調整をすることができた。遅刻した生徒が、穴を掘って土をバケツに入れて運んでいる風景をみたことが話題にあがった。生徒が箒を持って登校する姿を何度か見たが、掃除用の箒を家に持って帰っていると赤堀隊員から聞いた。
8月17日(土)	バガモヨへ移動	モロゴロからバガモヨに行くまでの道路沿いには、一面にサイザルアサが見られた。パイナップルのような感じで、何度か車窓からみて何だろう？とっていた。サイザルアサから、カゴなどができるそうなので、機会があったらカゴを見てみたいと思った。途中から道路を作っていてまだ整備されていない道を走った。マサイ族が牛の放牧をしている場面もみることができた。道路が整っている日本では、道路は整備されていて当たり前だと思っていたが、タンザニアでは、道路の整備が、必要とされている場所が多い。
8月17日(土)	市内視察（バガモヨ）	谷口隊員、加藤隊員にバガモヨの町を案内していただいた。10日ほど前に開店したレストランで食事をした時、水を6000シリングで購入した。ダルエスサラームのホテルでは、ミネラルウォーターが1000シリングだったので、物価の違いを感じた。市場では、大量の魚を油で揚げている場面を見ることができた。ヤシの実のココナッツミルクを初

		めて飲んだ。村の子ども達の民族ダンスをみる機会に恵まれた。バガモヨは「我、魂をここに残す」という意味だそうだ。このバガモヨは、奴隷貿易が盛んであった頃は、捕まえた奴隷を積み込む港であった。奴隷博物館も訪問した。そこにはその時代の貴重な資料や写真、また奴隷の拘束に使われた拘束具などが飾られていて、当時の奴隷に対する残酷さを感じた。
8月17日(土)	本日の振り返り	市場に行き、いつもは、山型にきれいに積まれた野菜が、積まれていなかった。秤が近くにあったそうなので、秤ではかるので、積んでいないのか疑問が残った。村で、ダウン症の子どもに出会った。谷口隊員は、タンザニアに来て、はじめて出会ったと言っていた。障がいのある子どもは、早くに亡くなってしまうのか？日本のダウン症の子どもも昔は、長く生きても20代までだったと聞いているので、タンザニアでもそうなのか？機会があれば聞いてみたい。
8月18日(日)	ダルエスサラームに移動	ダルエスサラームに近づくにつれて、高い建物やビルが増えていった。道路も整備されていた。途中、靴や雑貨、本、食材が揃っているデパートのようなところに行った。本屋には、日本のお弁当の本を見つけた。天井に色鮮やかなティンガティンガの絵を見つけて、心が和んだ。
8月18日(日)	教材等購入	ダルエスサラーム郊外にあるアーティスト達によって共同運営されているティンガティンガ村に立ち寄った。エドアルド・サイディ・ティンガティンガが描きはじめたタンザニア発のポップアートである。ティンガティンガ絵画は、鳥・野生動物・装飾的なイメージが色鮮やかに描かれている。カラフルな色使いで、みているだけで、明るく弾むような気分になった。ボードは、ネームを手書きで入れてもらい、1枚5000シリングだった。価格の表示はなく数枚購入したので値引きを求めたが、生計を立てているため、ほぼ提示された原価で購入した。
8月18日(日)	本日の振り返り	ティンガティンガ村には、120名ほどのアーティストがいる。ティンガティンガの絵で、生計を立てているので、数枚かっても値引きは難しいという話がでた。ファシリテーター小野さんが、授業の提案をしてくれた。ティンガティンガの絵1枚〇〇円、1日に〇枚絵を描いているアーティストの生活費は〇〇円など条件を生徒に伝えて、あなたなら絵をいくらで買う？と問いかけて生徒に考えさせる授業は、おもしろいと思った。

8月19日(月)	キパンランガンダ中等学校 米澤隊員	生徒数 500 名（男：女=3：2）程度だが通常は 300 名程度しか登校していないこと、教員数 26 名（半数以上は女性）だが、出勤しない先生もいることを聞き、社会の中の教育の位置づけが低いことがわかった。教科は、11 教科【英語、スワヒリ語、数学、物理、生物、化学、商業、簿記、宗教（イスラム教）、歴史、地理】で、音楽、体育、美術、技術・家庭科はなかった。電気が通っておらず、現在工事中であった。教科書は、持っておらず、日本の教育の現状が整っていることを実感した。米澤隊員の 1 年生物理の授業を見学した。表面張力を説明した授業で、一人ひとりとのやりとりを大切にしている姿が印象的だった。ムグラシ中等学校でもキパンランガンダ中等学校でも、チャイムは鳴らず、生徒が時間になったら校庭に行き、鐘を鳴らして授業が終了していた。
8月19日(月)	教材等購入	スーパーマーケットに教材購入に行った。私は、タンザニアの主食である「うがりの粉」を購入した。夏休み前に、生徒に、タンザニアの主食は「うがり」とであると説明をした。2 学期以降の授業で、実際にうがりを作って、生徒に試食ほしいと思っている。
8月19日(月)	本日の振り返り	国家が、サイエンスとテクノロジーに力を入れているので、中等教育学校のカリキュラムも理数科の科目が多いことがわかった。ニヤガワ校長先生は、「教育環境が整ってない中で、子ども達に、一生懸命勉強しなさいと教えている。」と言っていた言葉が心に残っている。とても、温かい先生で、私たち一人ひとりを受け入れてくれていたことから、校長先生の先生方や生徒を大切にしている姿勢が伺えた。帰国後の授業案について、一人ひとり発表をした。私は、生徒自身の生活とタンザニアの人々の生活を結び付けた授業にしたいと思っている。現地で撮った写真を使い、実際にやってみる体験を入れながら、タンザニアの地を少しでも身近な国として考えられるように工夫していきたい。
8月20日(火)	JICA タンザニア事務所 報告会	私たちが帰国後、日本の子ども達にタンザニアのことをどのように伝えるか、今後の教師海外研修の活かし方についてとても参考になる言葉をいただいた。友成次長の「JICA の仕事にはロマンがある」「教師という仕事にもロマンがある」という言葉が特に印象に残り、改めて教師としての使命感を感じた。タンザニアの教育は、日本に比べると就学、進学、設備の充実など課題がある。しかし、教育の分野だけを単体でみるのではなく、社会全体の中の教育としてみていくことが必要だと感じた。

8月20日(火)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	岡田大使は、私たちの話を一人ひとり熱心に聞いて、コメントをくださった。また、タンザニアの様々な分野の実情ついて把握されていて、質問の一つひとつ丁寧に答えてくださった。私は、タンザニアの町で、日本よりも多くの手足が不自由な障がい者がいることを感じ、支援する機関があるのか質問をした。障がい者が生活できるように支援する機関があることがわかった。しかし、精神的な障がい者の支援はまだ不十分だということもわかった。
8月20日(火) -21日(水)	タンザニアから日本までの 移動中および日本到着	ダルエスサラーム空港からカタール空港で乗り換え成田空港に向かった。飛行機の中では、タンザニカで過ごした9日間は、次から次に心に鮮明に思い出された。研修を共にした仲間と意見交換を交わしながら過ごした。日本に帰国後、この研修で学んだことを多くの人に伝えていきたいと思った。